

壮年会だより

平成24年9月度中原寺仏教壮年会だより Vol. 7



8月の行事報告 August

◆8月12日(日)【盂蘭盆会法要】午前10時

盂蘭盆会法要と全戦没者追悼法要が併修で営まれ、仏説阿弥陀経を参詣者と共に高らかに読経しました。

法話は林光寺住職、山田義俊師より「泥中の華」と題し、お釈迦様の説かれた阿弥陀経を分かりやすくお話下さいました。



■お盆の法要について：ワンポイント解説

お盆の法要の盆会(ぼんえ)は、盂蘭盆会(うらぼんえ)を略したもので、釈尊の弟子・目連尊者の母が、仏法によって餓鬼の世界から救われたという故事からおこったといわれています。浄土真宗の盆会では、亡き人を偲びつつ、お法りを聞くご縁とすることが大切なので、お墓や家庭の仏壇をお参りするだけでなく、お寺で仏法を聴聞する機会としましょう。

(出典：「み教えと歩む」、P357、本願寺出版社)

Column

「原発エネルギー問題と仏教」について考える

政府のエネルギー環境会議が、2030年の総発電量に占める原子力発電の比率を、0、15、20～25%の3案の選択肢を提示したところ、討論型世論調査やパブリックコメントで「原発0%」支持が最多であった。「原発15%」を目論んでいて危機感を強めた野田首相は、8月下旬、首相官邸前で毎週金曜日の夜、原子力発電所再稼働反対を訴え続けている市民団体代表らと面会したが、議論は平行線であった。

浄土真宗本願寺派の大谷光真門主は、本年1月、親鸞聖人750回大遠忌法要を終えて「今回の福島原発事故は、

自然の調和を破り、後の世代に大きな犠牲や負担を強いることになりました。これは肥大した人間の欲望のもたらしたところであります。」と述べ、また、全日本仏教会も昨年12月に「宣言文：原子力発電によらない生き方を求めて」を発表した。

皆さんは、日本の原発エネルギー問題(と仏教)について、どのように思われますか？

参考：朝日新聞(2012・2・22朝刊)、原発に対する宗教界の見解「宗教情報セター」、<http://www.circam.jp/reports/02/detail/id=2012>、

訃報のお知らせ

去る7月31日に壮年会の会員であります、竹下保彦さんをご往生されました。

通夜・葬儀は8月2、3日に中原寺聞法会館にて執り行なわれ、壮年会からも村田副会長などが参列されました。

秋の浄土園“収穫祭”開催のお知らせ！ ふるってご参加ください。



- 日時 10月8日(月) 祝日:10時集合
- 作業 10時より雑草取りと地馴らしと「さつま芋掘り」
- 昼食 収穫した野菜と芋のでのパーティー

平成24年9月～平成24年11月壮年会行事

9月の行事

- 9日(日) 13時 壮年会役員会(役員・監事・理事)
- 15時 壮年会法座
- 22日(土) 13時 秋期彼岸会法要

10月の行事

- 13日(土) 2日 旧跡参拝1日旅行
※当日、午前9時までに市川駅前にお集りください。
- 20日(土) 13時半 第24回文化講演会 講師：大峯顕師
※当日お手伝い頂ける方は12時半までにお集りください。

11月の行事

- 3日(土) 10時 お仏具磨き・清掃奉仕
- 13時半 壮年会法座
- 16時 壮年会役員会
- 20日(火) 18時 報恩講お逮夜法要
※当日お手伝い頂ける方は午前3時までにお集りください。
- 21日(水) 11時 報恩講日中法要
※当日お手伝い頂ける方は午前9時までにお集りください。

編集後記(壮年会：平成24年9月会報)

多くの方々のご投稿により充実した紙面とする事ができたことを、関係各位に感謝申し上げます。本誌の内容についてのご意見や、「会員の声」の原稿は常時募集していますので、どうぞよろしくお願いたします。

6月の行事報告 June

◆6月17日(日)【常例法座】午後1時～3時

親鸞聖人750年大遠忌と新任職継職法要の一大行事を成し遂げた心境を「ホット」と告白された。まさに本音の吐露というほかありません。

本日の講話は正信偈のなかの竜樹菩薩の一節から「有無の邪見」を払拭する必要性に言及されました。人間は概念によって物事を認識しています。そして一旦決めた概念は固定化される傾向があります。いま講義中の机ですが、器具というより広い概念で捉えれば状況によっては腰かけになったり、脚立になったりします。

浄土真宗は「過去帳」を大事にするという独特の考え方がありまして、過去に生きた先祖の精神を継承して自分の生きる支えとし、阿弥陀仏の本願を支えとしてきました。

源頼朝の御家人津戸三郎は、法然上人に出会うことによって出家し、法然上人、お釈迦様をご入滅された80歳の年にこの世での役割を果たし終えたと自覚し割腹自殺したといわれています。彼が道を修め悟りを得たのは、案内人としての法然上人の善知識との出会いがあったからこそと思われまます。

また法然上人は7高僧の善導大師、竜樹菩薩という善知識の著書との出会いにより浄土宗を開宗しました。

◆6月30日(日)【千葉組仏教壮年会研修会に参加させて頂いて】

船橋市称名寺で行われへ中原寺より平野新任職、石井壮年会会長らが参加しました。「カワラとつぶて(礫)をこがね(黄金)に変える」という演題で松戸・高林寺菅原智之住職より講話を頂きました。この言葉は、法然上人の直弟子聖覚法印の著「唯心抄」に「瓦礫變成金」とあります文章の一節を引用したもので、カワラ、礫は役に立たないもの、価値なきものの代表として捉えられております。そんな自分を、阿弥陀如来は光り輝く黄金に輝く仏さんに変えて下さる慈悲深い仏さまであると説いていただきました。

講話の前に、受講生から「生きる上で欠かせない大事なものは何か?」という命題でアンケート調査をされました。回答の多い順に 1:家族 2:命と健康 3:お金 4:仏の教え(念仏) 5:お寺の仲間 6:縁 7:子供の成長等でした。それぞれの回答に対して講師のコメントがなされました。



その竜樹菩薩は、釈迦入滅後500年後に生まれた印度の高僧で「大乘仏教」の創始者です。彼は人間が持つ「有無の邪見」の独善性を戒めています。人間は自分が「能力がある」「頭が良い」「金がある」という認識が、その人を驕り高ぶらせ我に執着させるものです。物自体には絶対的な価値はなく、「空」であると見えています。百万円のお金も金持ちには余り価値がありませんし、貧乏人にはありがたい金額です。ことほど左様に、見る人の物差しの尺度によって大小、軽重、多少が決まってくるものです。

人間(この世)の尺度を離れ仏(あの世)の尺度に立って物を見れば、この世での優劣の判断などは、とるに足らない一過性のもので一喜一憂に値しないものと自覚しなさい。そうすれば安心立命の境地に達する事ができます。「阿弥陀仏の本願」に帰依するとは私に全部任せなさい。そうすれば現生の内に浄土に行けますという説得と理解しました。現在ある状況がそのまま阿弥陀仏の最高の演出した場面です。

人間は何かしら心に不安を感じてモヤモヤとした気分を払拭出来ずに生きている。その根源は何に起因するか?について言及された。師と仰ぐ所沢の本田住職さんの言葉を引用して次のように指摘されました。人間は、「食べねば死ぬ」という緊急の課題を抱えている。他方「食べても死ぬ」という永遠の課題も回避できない。食べねば死ぬという課題は、豊かになった今日ではあまり深刻な問題ではないが、以前はこの為に一所懸命に働き家族を養ってきたのです。一方「食べても死ぬ」という課題は、生きとし生ける者には不可避免的に、しかも突然にやってくる。この不安が私たちにモヤモヤした気分を誘発するのです。「生老病死」は必ずやってくる。

人間は、条件が合えば生きがいを感じ、条件が満たされない場合は自分を卑下し価値なきものと思い、「生きていてもしょうがない、早く死にたい」と自暴自棄になります。「カワラ礫を黄金にする」と云う阿弥陀如来の願は、かかる人間の価値認識を改めさせ、生きる支えを与えてくださる励ましの言葉です。命の価値は、条件のいかに拘わらず光り輝く黄金のごとき仏の命であると説いています。

7月の行事報告 July

◆7月21日(日) 【常例法座】午後3時

常例法座にて前住職の法話を聴聞させて頂きました。法話のお題は「濁世の目足」、源信僧都の「往生要集」の冒頭にある言葉です。仏さまのみ教えが「濁世末代の目足」として路頭に迷う私たちへの生活の指針となると説かれたものです。生き方としては弥陀の本願に身を任せ、往生、成仏へ向かって悟りの道を歩むことの大切さを示唆していると理解しました。

また同じ内容の言葉を東井義雄先生も取り上げています。東井義雄先生の次の詩の一節「川に沿って岸がある 私に沿って本願がある 川のための岸 私のための本願」に記述されています。この詩句はまさに真宗信者の姿を如実に物語っています。

先生は兵庫県豊岡市但東町佐々木の本願寺派の東光寺の長男として、京都で生まれました。その後、京都から豊岡に帰りお母さんは小学校3年生の時亡くなられ、田畑を売り払う貧しい生活を余儀なくされたそうです。

その赤貧の様子は、食事は毎日のちよぼいちご飯でした。小さな鍋でお飯を炊きその時出るとき汁で大根のみじん切りを沢山にしてお米はちよぼちよぼで炊くので「ちよぼいちご飯」と表現されました。

先生は生涯初等教育に捧げられ、「いのちの教育」を信念とした教育者であり、またお念仏を尊とばれた真宗者でもあります。

親鸞聖人の和讃に「南無阿弥陀仏を称えれば、観音勢至もともに恒沙塵数の菩薩となりて、影の如くに身に添へり」があります。この和讃は「南無阿弥陀仏を称えさせて頂ければ勢至菩薩の知恵の働きで真実の智慧を授かり、他者への慈悲の心が生まれ弥陀の本願の御利益に預かる事ができる。」という意味です。

この自覚こそが見えども見えず、聞けども聞かえずの迷妄な私たちを、「濁世の目足」としての拠り所となる事でしょう。(村田 太喜夫 記)



住職就任のご挨拶

5月20日の親鸞聖人750回大遠忌法要ならびに住職継職法要から早くも3ヶ月以上が経過しました。法要当日やそれまでの準備におきましては壮年会会員のみなさまに多大なるご協力をいただき、まことにありがとうございました。

住職を継職したといっても、まだまだ皆様におかれましては「副住職さん」「俊斉さん」と呼んだほうがしっくりくるかと思ったり、私自身も「住職」という言葉にピンと来ないときもありますので呼びかたなどは徐々に慣れていければと思っています。

中原寺で生まれ育ち、先代住職の姿を見てきて感じる

◆7月29日(日) 第21回 ファミリーパーティー
「あえてよかったね」

中原寺の恒例、夏の催し物「ファミリーパーティー」が好天気の中、盛大に行われました。

*第1部 午後2時～ 東葛フィルハーモニー吹奏楽のメンバーの方の演奏が行われたが私は第2部の準備で拝聴出来ず残念でしたが、拝聴された方々からは素晴らしい演奏との事、楽しい一時でしたと喜んで頂きました。



*第2部 午後3時20分～ 墓地駐車場にて屋外パーティー。子ども達もゲーム(サッカー・ゴルフ等)を意気揚々と競いゴールした時には大喜び、皆元気で頑張った。



盆踊りも老若男女リズムに合わせ楽しく、また暑い中額に汗を一杯で踊られる姿は頼もしいものでした。抽選会も、番号を読み上げる度に、当籤した人は大喜び外れた人は、頭を垂らしがっかり、残念そうでした。然し猛暑の中行われましたので、熱中症等体調をくずされた方は居られず無事終了出来た事を皆様に感謝致します。(村田 太喜夫 記)

ことは常にご門徒さんのご協力・ご指導があつてこそ、50年間住職としての重責を果たしてこられたということです。

その中において、昨年30周年を迎えた仏教壮年会の皆さまのお力添えは本当に心強く感じたことと思います。

中原寺壮年会の規約において「目的」の項に「浄土真宗のみ教えを仰ぎ自信教人信の報恩行に徹し中原寺教化活動推進の核体となる」と記されています。

新しい時代を迎えてこれまで以上に、阿弥陀さまのお慈悲の光に照らされているわが身を喜び、その喜びを一人でも多くの人に伝え、み法の輪が広がるために、これからも共に歩んでまいりたいとの想いがあります。

なにゆえ浅学非才、これから一層皆さまにお育てを蒙らなければならなりません。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしく願い申し上げます。合掌

感話
シリーズ7

【2012 中原寺こども合宿】
8月18日(土)・19日(日)



新住職就任後初の今回の合宿は、多くの取り組みを「キッズサンガ」の指針に沿ったものとなりました。まず合宿のテーマを「食事を通して、命をいただく」とし、次に「次代を担う人の育成」と「その子供たちを取り囲む家族の人々に心の安らぎとなれるお寺への進化」という指針が住職より合宿スタッフに伝えられました。

今年は子ども合宿修了生にも積極的にスタッフとして参加してもらい、日程作成やプログラムでの進行を担ってもらうなど中心的な役割を果たしてもらいました。中学生以上になった「子ども合宿修了生」とそのお友達、住職、前住職、坊守、前坊守、聡明さん、住職のご友人の西村さん、壮年会や婦人会から総勢30名の合宿スタッフで33名の子供参加者をお迎えしました。

開会式は、住職から初めの挨拶を頂き、合宿修了生でもある星野さんの司会で始まりました。低学年中心の参加者からは緊張感と不安感が伝わってくるような開会式となりました。次に自己紹介や親睦を兼ねてのゲームでは、その進行も修了生(山本君、窪寺さん、小川さん)にお任せし、住職やスタッフは「子供たちと接するときの心得」に従い、子供たちと一緒にゲームに興じていました。

「子供たちと接するときの心得」とは、学校や家庭でいわれている「早く」「急いで」「ぐずぐずしないで」という言葉を使わず、また注意するときは必ず子供の目線まで腰を下ろし、叱られている理由が分かるまで話すなど、お寺が子どもにとって居心地のよい場所となるように心がけるということに配慮しました。

印象深く記憶に残る合宿になるような方策を具体化しました。例えば、「巻き障子」の開閉門式は住職が小さい頃、合宿参加した時の記憶に今でも鮮明に焼き付いている印象的な場面だったということで今年から子供たちの代表により開閉されることになりました。

住職の法話も合宿テーマの主題に関連した「食前のことば」の解説として、食事はただ食物を摂り、栄養を補給するということではなく、多くの命の上にあることを気付かせ、有り難くいただくの大切さを教えました。

「食後のことば」の解説として、「浄土園」で壮年会の方が育てたじゃが芋や玉ねぎ、それを子どもたちが調理して、婦人会の方が味付けしておいしいカレーが出来たことなど食卓に並ぶまでに多くの方々のおかげでおいしくご馳走を頂けたことに感謝しましょう。食事の度にこの言葉の意味を思い出して、「残さず」「ありがたく」命をいただいで下さいと説かれていました。

ほかにも随所に今回の取り組みの成果がありました。新住職のもと「こんなにも変わったのか」と特に私が感心した場面がありました。以下に列挙します。

*司会・指導・担当を修了生にお任せし、住職が子どもたちと同じように合宿に参加したことで子どもたちとゆっくり話す時間が持てたこと。

*子どもたちが住職に怒られることがなくなったので子ども達の「住職さん」と呼ぶ声が例年になく多かったこと。

*なかなか出来ない子、指示が理解できない子に自然と他の子どもたちがサポートにまわってくれたおかげで「早く」「急いで」を使う場面がなかったこと。

*空いた時間の有効利用で聡明さん指導のもと「スマイルアゲイン」の歌を手話付で練習をしました。ほんの少しの練習にもかかわらず、ご父兄の前で上手に手話を交えて歌えたこと。

今回見直された多くの取り組みが、子ども達とお寺のよい関係作りに貢献出来たと思いつつ、子どもたちが新住職さんを身近に感じ、うれしい時かなしい時にお寺を心の拠り所(居心地のよい場所)として、また訪ねてくれることを願いたいと思います。

(片山 晴司 記)

